



講演 平成29年12月7日

## シマフクロウの最新状況

シマフクロウ環境研究会代表 竹中 健

今回はシマフクロウについて、その分布・種としての重要性・必要となる環境整備等を中心に、最新の状況をお話したいと思います。

まずシマフクロウは体長約70cm、翼開長で約180cmと世界でも最も大きな鳥の一つです。また名称の「シマ」は縞模様ではなく「島」つまり北海道を表しています。

個体数は、ロシア（亜種）では、アムール川流域・レナ川流域などを中心に2000羽程度と推測され、北海道では、知床や根室などを中心に現在60数つがい程でさらに増加中です。北方領土の国後島では23つがい程が確認されています。

なお最近ではDNAによる研究が進み、日露の個体群が分かれたのが50万年以上前であると分かりました。そして、その成果により、この2つは亜種ではなく別種とされる可能性が出てきます。求愛の鳴き方も、ロシアでは雄と雌が交互に2セット計4回であるのに対し、北海道では雄・雄・雌の計3回と異なっています。もしこれが別種と認められれば、シマフクロウは世界中で100つがい程度しかいない大変な希少種となるでしょう。

また国後島の生息数はここ30年間安定していますが、今後懸念されるのは日露共同経済活動です。国後島の北半分は自然保護区で旧ソ連の占拠後全く開発されていないのですが、上記の経済活動に野生動物に関する話は出てきません。国後島は狭い島ですからもし開発の手が入ればその影響は深刻です。現在では主に漁業権や観光の話が注目されていますが併せて保護策も検討していく必要があるでしょう。

さて、道内でのシマフクロウ保護策で



写真:山本純郎

すが、減少の最も大きな要因は餌（川魚）の減少でした。そのためこれまで給餌が重要となっていました。しかし、大掛かりな給餌池はコストが高く、維持管理の負担も重くなります。移動可能な給餌池（バスタブ型）を使うことで、見栄えこそ良くはありませんが、低コスト・低負担で給餌が行えます。ただし、これから保護は給餌依存個体を少しでも減らすことが重要です。

こうした活動の中で重要なのが「生態系の循環を再構築する」という視点です。シマフクロウの保護は、農林水産業や、北方領土やロシア地域では外交関係とも密接に関っています。これから北海道が産業の付加価値の向上を目指す中、生物保護のため、ただ産業への制限を行うのではなく十分でしょう。例えば自然の豊かさや生態系の循環を大切にしているという点を海外へアピールする事で、付加価値を高めていく事が必要になります。そうしていかなければ、生物も守れず、産業も継続してはいけないでしょう。北海道は火山や湧水の恩恵を受け、サハリン・沿海地方と比較しても本来的には生物資源の豊かな土地です。その事をまず我々自身がしっかりと理解することが重要だと思います。



(写真1)



(写真2 観察小屋の内部)

道東の厚岸と根室のほぼ中間にある浜中町は、霧多布湿原に代表される自然の宝庫として知られています。6月下旬から7月上旬にはエゾカンゾウの群生が見事な黄色の花の海を作り出します。この浜中町一帯で、シマフクロウをはじめとした野生生物の保護・保全活動を行っているのが「NPO法人シマフクロウ・エイド」です。同法人は、平成20年6月に設立され、菅野正巳会長、菅野直子事務局長のご夫婦が活動の中心的存在となっており、同地域に生息するシマフクロウの補助給餌や生息状況の調査および保護活動の取り組みを紹介する講演会やパネル展を町内外で実施しています。平成29年9月29日には、札幌市においても講演会が開催され、私も出席させていただきました。

北海銀行は、自然保護活動を行っている団体を支援するために「ほっくー基金」を創設、毎年10先ほどの団体に寄付を行っており（平成22年の創設以降、資金の贈呈先は延べ42先）が、シマフ

クロウ・エイドは、平成29年度の贈呈先に選ばれました。私は、「ほっくー基金」の理事長をしている関係で、資金の贈呈式への出席の機会に、シマフクロウ・エイドの給餌活動の現場にご案内いただき、菅野直子事務局長からいろいろお話を伺ってまいりました。

給餌場所は、同地区的森林地帯にありますが（写真1ご参照）、観察は給餌池の脇にある観察小屋から昼夜ビデオ等で行い（写真2ご参照）、これまでに十数羽の雛の巣立ちを観察していることです。こうした保護活動の現場は、当然のことながら非公開とされておりますが、それだけに実際の保護活動は菅野ご夫妻のご尽力にかかるており、保護活動の現場の大変さを痛感させられました。今後、シマフクロウの保護活動に実際に従事している方々の後継者をいかに確保・養成していくかが、大きな問題になることが想定されます。それだけに、私共の「北海道シマフクロウの会」の役割も益々重要性が高まつてくるものと考えられます。



6

NPO法人シマフクロウ・エイド「浜中町」

北海道シマフクロウの会会長 横内 龍三

## シマフクロウの卵

シマフクロウ保護・研究家 山本純郎

フクロウ類の卵はすべて白色無斑である。他の鳥類も樹洞等で営巣する種類は白色をしている。理由として他の捕食者から発見されることが少なく、また親鳥が巣に戻った時、卵の位置が確認しやすく踏んづけたりすることを避けられるよう、暗がりでも分かりやすい白色をしているものと考えられる。

フクロウ類の一腹の産卵数は暖かい地域に生息する種類は卵数が少なく、寒い地域では多くなる傾向がある。また小型種は卵数が多く、大型になるにつれ少なくなっている。勿論例外もあるが、寒い地域では雛の死亡率が高く、小型種は捕食されることが多いからと思われる。また生息する地域の環境や食べ物の増減も大きく関わってくる。シロフクロウは北極圏で営巣する大型種であるが、卵数が10卵を超えることも少なくない。

シマフクロウの卵であるが、形は球形に近いものからニワトリの卵のように楕円形のものまで様々である。大きさは最小のもので長径 55.9 mm × 短径 49.0 mm、最大は長径 69.4 mm × 52.8 mm、重さは 105.5g、平均で長径 63.7 mm × 短径 50.7 mm。重さに関しては産卵直後に測定しなければならず飼育下のもので示した。最小の卵は補充卵の可能性が高い。産卵数は通常 2 卵であるが、飼育下を含め 1 卵から 3 卵、4 卵の記録もある。抱卵は雌だけが行ない、雄は餌運びに徹している。これは他のフクロウ類にも共通している。卵は約 35 日で孵化し、その後 50 日前後で巣立ちする。

アカネズミを運ぶ雄



●当会顧問の山本純郎さんが皆さんの質問にお答えします。普段気になっているシマフクロウのこと、何でも結構ですので事務局までお寄せください。お待ちしております。

●入会を募集しています。引き続き当会の趣旨にご賛同いただける個人の皆様の入会を募集しております。ホームページからも入会の手続きが可能となっておりますのでご覧ください。

北海道シマフクロウの会 事務局 〒060-8640 札幌市中央区大通西3丁目11番地 北洋ビル6階 北海道二十一世紀総合研究所 内  
(担当:米谷・山内・北口) TEL 011-231-8681 FAX 011-231-8683 URL:hokkaido-shimafukuro.org

# 北海道 シマフクロウ通信

北海道シマフクロウの会 会報



第17号